岐阜市歴史博物館にお預かりした社宝（1）

筧　真理子
（岐阜市歴史博物館学芸員）

岐阜市歴史博物館では、昭和六十一年以来、石造狛犬（天正四＝一五七六年銘、岐阜県重要文化財）一対をお預かりし、特別展や常設展に展示させていただいてきましたが、このたびそれに加えて十三件の社宝を御寄託いただくことになりました。いずれも伊奈波神社で大切に守られてきた貴重なものばかりです。

今回はそのうちから、四件の縁起と、社殿のようすを伝える絵画類三件について紹介したいと思います。

神社の由来をしるした縁起のうち、「美濃国第三宮因幡社本縁起」は昭和四十七年に岐阜県重要文化財に指定されました。もとは折本でしたが、現在は巻子の形になっています。主神の五十瓊敷入彦命の事績を中心にして景行天皇の時代の社壇造営、用明天皇の時代の社殿造営などを語るとともに、鏡を破る不思議な金丸石が奥州から美濃に運ばれ一夜にして大山となったという、破鏡山・一石山という金華山の別名の由来も書かれています。奥書きからは、古い縁起が紛失したので延文四年（一三五九）に卜部兼前が改めて調進し、それをさらに文明四年（一四七二）に斎藤妙椿が世尊寺行高に改めて書写させ、後土御門天皇直筆の外題を請いうけて奉納したものであることがわかります。昭和十六年発行の『伊奈波神社略誌』によると原本は天正十一年（一五八三）の兵火に焼失し、現在残されているのはその写しですが、伊奈波神社の歴史を伝える根本史料というべきものです。

この他にも、同内容の縁起に訓点を付けた一巻、やや内容の異なる「濃州厚見郡因幡神縁起」一巻、「美濃国因幡大菩薩本縁起之事」一巻と、合わせて四巻の縁起が伝えられています。

明治二十四年（一八九一）に起こった濃尾震災はこの地域に大きな被害をもたらし、伊奈波神社も神輿庫一棟を残してすべて灰燼に帰してしまいました。しかし、今回お預かりした社宝のうちには、震災前の江戸時代の社殿のようすを伝える資料三件が含まれています。一つは天和二年（一六八二）の覚え書で、本殿・拝殿・鐘楼堂の大きさなどがしるされていますが、建物の姿はわかりません。天保十年（一八三九）の境内図と、安政四年（一八五七）の美しく彩色された絵からは、江戸時代末の境内の具体的なようすを知ることができます。

左ページの〈図1〉は安政四年の絵で、本殿から参道入口（米屋町・白木町の通り）までを高い視点から描き、中央上部には峯明神の鳥居や社殿も見えます。桜がピンクの花を咲かせていますから季節は春で、ところどころには黄色く色づいたシイと思われる樹木も見えます。建物や石灯籠などの配置は正確で、句碑まで書き込まれた細やかなものです。原図は尾張藩主に命じられた小田切春江の手になり、現在伝えられているのはその精密な写しです。春江は尾張藩士ですが、画家としての腕も確かな人物でした。ちなみに、この絵の続きには同じく春江の描いた岐阜町の絵があります。平面的な古地図を除くと、江戸時代の岐阜町の全貌を描いた絵画は現在のところこれ以外にはなく、大変珍しいものです。昭和三年に発行された『岐阜市史』には掲載されていますが、今回その原本を見出したことは望外の喜びでした。

天保十年の境内図は、境内の見取り図に建物の説明などを書き添えたもので、〈図2〉はそのうちの本殿周辺と善光寺（安乗院）周辺の部分です。春江の絵と対照しながら、当時のありさまをもう少しくわしく見てみましょう。

石畳の上にそびえる本殿の前には、三本の木が囲いの中に立っています。これは三本杉と呼ばれた神木で、春江の絵にもはっきりと描かれています。濃尾震災で焼けてしまったと思われ、現在はその姿を見ることはできません。本殿の回りには末社がいくつも建ち並んでいました。周囲に生える樹木は杉が多く、桜は一本もありませんが、これは今も同じで、荘厳な神域にふさわしい樹相となっています。本殿に登る石段下の右手には、棚に囲まれた烏帽子岩がありました。烏帽子岩は現在では、楼門内の絵馬掛け所のそばに移されています。

こうした神さびた雰囲気と対照的だったのが善光寺周辺です〈図3〉。善光寺の隣には芝居小屋と、大黒屋友三郎の茶店が並んでいました。道を隔てた池のそばにも、茶店が三軒と、遊技場の楊弓小屋がありました。このあたりは、岐阜町最大の娯楽の場でもあったのです。天保十年の境内図では建物のようすはよくわかりませんが、春江の絵には特徴のある善光寺の隣に、板葺き屋根の大きな芝居小屋が描かれています。祭りのときだけの臨時施設ではなく常設の芝居小屋で、ここで上演された芝居のプログラム（番付）が、早稲田大学や岐阜県博物館などに三〇点余り残されています。加納や黒野などからも武士や村人が見物に訪れたことが当時の日記類からわかっており、参詣だけでなく芝居を楽しむためにも多くの人が集まりました。

この「いなば芝居」には江戸や上方の著名な俳優も訪れて出演しました。江戸時代の歌舞伎を代表する名優で「歌舞伎十八番」の制定などでも名が知られる七代目市川団十郎は、若くしてオ能を発揮して江戸っ子に絶大な人気を誇っていましたが、天保の改革で江戸を追われて上方など各地を転々としました。団十郎が江戸に帰ってもよいとの赦免の通知を受け取ったのは、この伊奈波神社前の芝居小屋に出演して岐阜町に滞在していたときで、嘉永三年（一八五〇）正月のことでした。

江戸時代から明治、大正、昭和と時代が移り、神仏分離、鉄道の開通などによる交通体系の変化と繁華街の移動、濃尾震災などの大きなできごとともに伊奈波神社境内のようすも変わってきました。伊奈波神社に参拝されるときには、ここに述べたような江戸時代のようすも思い描いてみてはいかがでしょうか。

図1　安政四年（1857）の境内図

図3

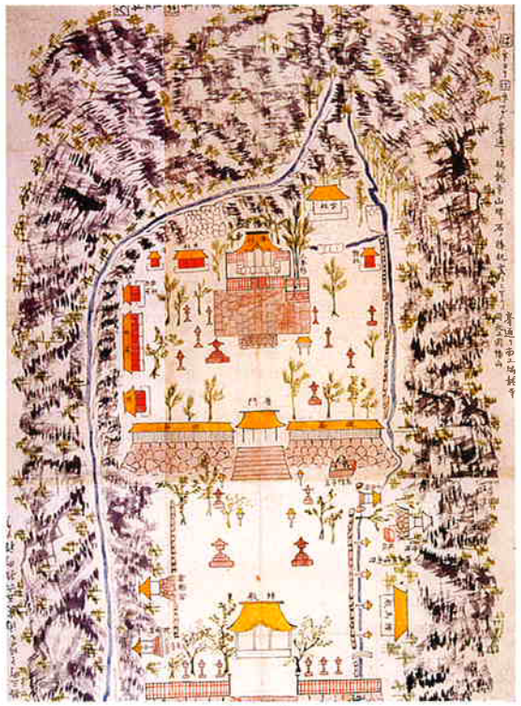

図2

天保十年（1839）の境内図